～仲間とともに地域の発展を目指す～

「プチヴェール」で生きがい農業を！

前田恒夫さん（弥富市））
プチヴェール、水稲

【平成22年1月20日掲載】

前田恒夫さんは弥富市鮫ケ地（旧十四山村鮫ケ地）在住で、仲間とともにプチヴェールを生産するほか、地域農業の発展に向けた様々な活動をしています（写真１）。
前田さんは、元十四山村農協の職員で、農協在職中には、十四山村全体をまとめた、他に例を見ない大規模な集落営農システムの立ち上げに貢献されました。この集落営農システムでは、少数精鋭の企業的な水田オペレーターが、大型機械を使って水稲の耕起・代かき、田植え、収穫の基幹３作業を行っています。またオペレーターの集落担当制を採用しており、１軒のオペレーターが１つの集落のすべての農地を責任をもって作業しています。これにより、オペレーターは効率的に作業ができるので、適期作業が可能となり、高品質な米を安定的に生産できるようになりました。
一方、地主側は、集落内の農地の作付計画をまとめるほか、水管理や草取りなど大型機械を導入できない作業を担っています。これらの取組は今でも続けられており、多くの農地が効率良く利用されています。
ここからは、前田さんが農協を退職されてからの活動を中心に紹介します。

写真１　前田恒夫さん

１　地域を元気にするために…「コスモス会」を設立

（１）コスモスを楽しんでもらおう

農協を退職した後、「地域を元気にするために、何か役立つ活動をしたい」と考え、鮫ケ地に住む仲間に声をかけ、平成９年に「コスモス会」を設立しました。コスモス会のメンバーは、定年退職した人、退職を控えた人が中心で、男性だけでなく、夫婦で参加する人もいます。
当初の活動はメンバー同士の交流が中心でしたが、「せっかくコスモス会という名前をつけたので、コスモスを作り、いろいろな人に見て楽しんでもらおう！」と呼びかけ、水田でコスモスの栽培を始めました。秋の

田んぼにいっぱい咲くコスモスは、往来の人々の目を和ませています。また、保育園児による花摘みも実施しました。これらの活動は現在でも続いています。

（２）エダマメ収穫体験で地域に人を呼び込む！

平成11年からは、黒豆の栽培を始めました。これは、コスモス会の活動を会費だけで賄うには限界があるので、活動費の足しになればと考え、始めたものでした。
当初は水稲の転作跡地30ａで、年末の煮豆用として生産し、販売していましたが、平成16年からは作付面積を80ａに増やし、黒豆のエダマメ収穫体験（有料）を企画し、参加者を募りました。参加者は当初100～120人ほどでしたが、そのエダマメのおいしさから、近年では1,000人もの人が参加する人気となっています。集客範囲は、はじめは地元十四山が中心でしたが、今は稲沢市、名古屋市など尾張地域全体から集まるようになりました。また、地元小学生の収穫体験も受け入れ、農業への理解を深めてもらう活動も行っています。

２　プチヴェールで高齢者の生きがい農業を

平成11年、同年代の人と一緒にケールの栽培を始めました。これは、農業で収入を得ることで生きがいを持つことと、自分たちの農地を有効に活用するためにと考え、始めたものでした。しかし、ケールは価格の変動が激しく、販売が難しかったため、平成13年にスティックヴェールに切り替えました。ところがスティックヴェールは収穫期間が約１か月しかなく、収穫作業が非常に忙しくなってしまい、高齢者には向かないため、平成14年にプチヴェールを導入しました。
プチヴェールは、ケールと芽キャベツを交配してできた結球しない芽キャベツのことで（写真２）、８月下旬に苗を植えつけ、12月から３月までの長期間収穫ができます。そのため、収穫作業はそれほど忙しくなく、収穫物も軽いので、高齢者でも無理なく取り組むことができています。
現在、前田さんを含めた４人で、転作跡地のほ場36ａで栽培しています。販売先は、自分たちで開拓した地元の仲買業者です。また愛知県のエコファーマーの認定を受け、平成19年から始まった農地・水・環境保全向上対策を活用して減農薬・減化学肥料栽培に取り組み、環境に優しい農業を実践しています。

写真2　プチヴェールほ場（左）
収穫部分（右）

３　農業の発展が地元の発展に

「プチヴェールは高齢者向きの作物で、生きがいを持って取り組むことができます。体を動かすことは、何より健康維持につながるので、地域のみんなにもっと仲間になってほしい」と前田さんは考えています（写真３）。
なお、平成22年産水稲では、前田さんたちが中心となり、鮫ケ地全体で新たな取組を始める予定です。それは、菜の花を緑肥とし、化学肥料と化学合成農薬の使用量を地域慣行の５割に削減した特別栽培米の生産です。生産した特別栽培米は鮫ケ地の非農家の人を中心に消費してもらい、菜の花を緑肥としてすき込む前には、地域の人を呼んで菜の花の摘み取りを行うなど、地域の人との交流を考えています。これらの活動を非農

家の人の農業理解に、また「地産地消」につなげたいと考えています。
　「旧十四山村は農業地帯です。農業とともに地域が発展してほしい」と前田さんは語られました。

執筆・取材協力
農業経営課、海部農林水産事務所農業改良普及課

Copyright © 2009, Aichi Prefecture. All right reserved.